

令和 4 年 8 月 25 日現在

機関番号：11501

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2021

課題番号：16KK0021

研究課題名（和文）清代モンゴルの駅システムを巡る多角的研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）A multifaceted study of the relay station system in Mongolia established by the Qing Dynasty(Fostering Joint International Research)

研究代表者

中村 篤志 (NAKAMURA, Atsushi)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60372330

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,200,000円

渡航期間： 7ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は、清朝統治下のモンゴルにつくられた駅に注目し、モンゴル国における文献調査と現地調査を通して、その社会史的意義を多角的に考察したものである。その結果、駅が遊牧社会において人や情報を結び付ける結節点として機能していたこと、とくに、現存する駅関連施設の遺構調査や、「ハラチン集団」の未裔への聞き取り調査が、清代の駅研究においても有効であることなどを明らかにした。これらの成果は、国際シンポジウムで発表し、国際共著論文が査読誌に掲載されたほか、モンゴル語・中国語・韓国語でも論文を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、従来、清朝のモンゴル支配のツールであり象徴でもあった駅を、社会史的視点で捉え直した点にある。本研究によって、清代モンゴル社会の人的流動性の高さ、駅が持つ人や情報を結び付ける結節点としての機能、駅を取り巻く地域社会の状況などを明らかにした。また、現存する駅関連遺跡の遺構状況、今も駅跡地周辺に暮らす「ハラチン集団」への聞き取り調査を行い、清代駅研究が持つ現代的意義についても明らかにした。これらの成果は国際シンポジウムや査読誌などで発表したほか、現地メディアでも取り上げられた。

研究成果の概要（英文）：This research project focuses on the relay stations in Mongolia established by the Qing Dynasty. It analyzes their socio-historical significance from various perspectives based on archival research and field research conducted in Mongolia.

This study uncovers that the hitherto neglected function of the relay stations; they served as nodes for connecting people and information in nomadic societies. In particular, this research has been able to demonstrate that surveys of the remains of existing station facilities and interviews with descendants of the "Qarachin group" lead to significant findings in the study of the relay stations of the Qing Dynasty.

These findings have been already presented at international symposia and published as an international co-authored paper in a peer-reviewed journal. Some of them have been published as academic papers in multiple languages including Mongolian, Chinese, and Korean.

研究分野：モンゴル史

キーワード：モンゴル史 清朝 駅 交通 日記 行政文書

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を計画した背景として、近年の清朝史・モンゴル史研究において、清朝の多民族性や多元性およびモンゴルなど藩部地域の自律性が解明される一方、逆に、清朝がそのような自律的な地域をいかに長期間統合し得たのかという地域統合のメカニズムの解明が疎かになっていたことが挙げられる。

このような大きな課題意識のもと、申請者は、清朝の地域統合を物理的に支えたインフラとしての駅網に注目した。駅は、もとより清朝がモンゴルを支配するために敷設したものであるが、清朝の官僚や兵士だけでなく、モンゴルの王公や兵士など民族や身分の異なるさまざまな人間がそれを利用し往来した。何より、この駅の維持管理を担ったのは、賦役として各地から集められたモンゴル人であった。このような、駅を介した人や情報の移動は、清朝のモンゴル支配において重要な役割を果たしたと考えられるが、現在まで、その歴史的意義はどうか、駅の基本的運用実態すら明かではない。

そこで基課題では、第一に、モンゴル国所在の駅関係の行政文書の分析から、駅システムの運用実態を数的かつ通時代的に解明すること。第二に、実際に往来した満洲人官僚やモンゴル王公らの日記史料の分析から、移動によって蓄積された経験や情報と、清朝の地域統合との関係性を解明することを目的とした。

しかし、研究を進めるうちに、モンゴル国所在の駅関係文書が予想以上に多く、さらに大型駅の遺構や、駅に関わる地域伝承が現在まで残っていることが明らかになり、現地での網羅的な文書調査そして駅に関するフィールド調査が必要であることが明らかになった。このような研究対象の拡大に伴い、専門に近いモンゴル国の研究者と共同で研究し、成果を多角的に分析する国際共同研究体制の構築が必要であると考えた。

## 2. 研究の目的

以上の背景から、本研究では長期間モンゴル国に滞在し、清朝の地域統合を物理的に支えたインフラとしての駅網について、具体的に以下の3点を目的として設定した。

第一に、未研究の同国中央文書館所蔵の駅関連文書などを網羅的に調査し、体系的に分析することで、駅の運用実態を解明する。

第二に、モンゴルに派遣された官僚の日記史料などに登場する固定型の大型駅に焦点を当てて現地調査を行う。駅のなかでも、小集落や寺院などが併置され、長期間地域の結節点となったと推測される固定型の大型駅を多角的に分析することで、駅の社会的意義を考察する。

第三に、共同研究者と恒常的に集まり、研究成果を共有し合い多角的分析を進める。その場に若手研究者や大学院生も加え、次世代の研究交流を行うプラットフォーム構築を目指す。

## 3. 研究の方法

2018年3月末より約半年間、モンゴル国に滞在し、モンゴル国立大学歴史学部を受入れ機関として調査研究を行う。一度の調査で成果が得られない事態が想定できるため、長期調査の前後も複数回渡航し、事前調査、事後の補足的調査を行う。

具体的には、第一に、上記のモンゴル国中央文書館のほか、モンゴル国立図書館などの各図書館の所蔵史料、著作物を調査し、モンゴル国所在史料を体系的に把握する。とくにモンゴル国立中央文書館所蔵の行政文書は駅関連のものだけでも膨大な量があることがわかっており、これら进行分析することで、清朝のモンゴル統治の基礎インフラとしての駅の運用実態を明らかにする。

第二に、旧駅路を実地調査し、駅に関する施設の遺構調査、周辺住民に対する地域伝承などの聞き取り調査を行う。これにより、駅が地域社会でいかに位置づけられ、受容されていたのか、さらには清朝崩壊後、現在に至るまでの駅を取り巻く地域社会の変容過程を明らかにする。

第三に、これら調査と調査結果を共同研究者や現地研究者、調査協力者らと共有し、国際共同研究として発展させる。

## 4. 研究成果

総じて、本研究により、駅が持つ、遊牧地域におけるターミナルとしての機能、および地域社会における重要性を解明することができたと考えられる。また、駅に関する膨大な手つかずの行政文書や地図、日記史料など今後の研究に必要な基礎史料についての情報の共有、駅の役所や駅寺院などの遺構の規模や分布状況、駅に関する現地聞き取り調査の有効性なども明らかにすることができ、今後の研究展開に必要な道筋を付けることができたと考えられる。

新型コロナウイルス感染症の影響で、最終年度は十分な海外調査ができなかったが、それでも研究期間全体を通じて、研究の成果を、海外での研究会や国際シンポジウムなどで発信し、国際共著論文を査読誌に掲載したほか、多言語で論文を公開することができ、国際共同研究として一定の成果は上げることができたと考えられる。

具体的な研究成果は、概ね以下の4点にまとめられる。

第一に、駅研究の前提となる当時の社会の流動性を分析した点である。モンゴル国立中央文書館の駅関連文書のほか、既刊史料のなかであまり重視されてこなかった史料などを用い、

当時の社会の流動性について統計的分析を試みた。その結果、賦役により長期間旗外に派遣された人の総数は少なく見積もって全人口の4%以上いたと考えられ、当時の人々は、我々研究者が想定していた以上に、旗の外の社会と関わる機会を持っていたことなどがわかった。

第二は、駅舎の社会的位置づけについて分析した点である。

駅舎は上記のような賦役によって動員されたモンゴル人官兵によって維持管理されたが、日記史料などの分析から、駅舎を往来した人々は清朝の大臣や官兵だけでなく、漢人商人やロシア人商人なども含まれ、駅舎が、地域社会において、民族や身分階層・出身地を異にするさまざまな人が集散し、物や情報が集まる結節点として機能していたことを明らかにした。

第三は、フレー（今のウランバートル）から南に延びる14駅舎について多角的分析を試みた点である。

この駅舎ルートは、北京とフレーさらにはロシアとを結ぶ重要ルートであるにもかかわらず、制度上は支線と位置づけられたため、駅舎名称の異同すら整理されていなかった。そこで、駅舎の行政文書のほか、地図史料や日記史料を分析し、さらに現地調査の成果も取り入れ、駅舎名称の時代的変遷を整理したほか、設置場所の地理状況、さらに寺院や倉庫、井戸などが併設され、駅舎に一定の土地を占有していたこと、さらに駅舎が1940年代まで実際に利用されており、遊牧社会における重要な結節点として存在し続けたことなどを明らかにした。

この研究は、現地若手研究者と共同で行ったものであり、現地調査と文献調査を分担しつつ、駅舎の社会史的意義について共通の見解に至ったもので、査読誌に国際共著論文として掲載することができた。

第四は、漠北駅舎の幹線であるアルタイ軍台の東半分にあたるハラチン駅舎について多角的分析を試みた点である。

このハラチン駅舎は漠北駅舎のもっとも重要な部分であり、漠南のハラチン部などから官兵を移住させ維持管理に当たらせていた。本研究では、主にモンゴル国ドンドゴビ県西部に位置する各駅舎について、ドローンやGPSなどを用いた遺構調査と、周辺住民への聞き取り調査を実施した。

その成果として、まず上述のフレー以南14駅舎との分岐点でもあったサイロス駅舎について、史料に記された駅舎衙門や寺院などの状況を現地調査によって後付けることができた。駅舎衙門の大きさや構造、寺院や関帝廟なども含めた遺構全体の分布を明らかにすることができ、他の駅舎施設を比較する上での基準として提示することができた。

次に、現地調査をするなかで、このハラチン駅舎の維持管理に当たっていた「ハラチン集団」の末裔が、現在も自分達のアイデンティティを維持して現地に多数存在していることが判明した。そこで「ハラチン集団」に焦点を絞り、その成立から現在に至るまでの歴史を整理するとともに、上述のサイロスも含めたハラチン駅舎各駅舎の駅舎寺院についての遺構調査とその歴史的意義、聞き取り調査から得られた現在の「ハラチン集団」について分析した。

その結果、清代に作られた駅舎寺院が「ハラチン集団」の記憶の伝達や結集に重要な役割を果たして来たことなど新たな知見を提示することができ、駅舎の社会史的意義、現代史的意義を提示することができた。なおこの研究成果はモンゴル語論文としても発表したほか、日本語論文に加えその中国語・韓国語訳も発表することができた。また現地のメディア・新聞などでも取り上げられ、一定の評価を得た。

本研究は、国際共同研究として行ったことで当初計画していた以上の成果と、さらなる課題を得ることができた。この成果をもとにさらなる調査・研究を進めたかったが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、現時点での調査成果を総括し、ひとまず本研究を終了することとした。本研究で構築することができた内外の研究者・協力者との関係、史料や現地調査のデータは改めて次の課題へ継承することとした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中村篤志	4. 巻 12
2. 論文標題 清代モンゴルの駅舎門サイルオス：現地調査からみた遺構の分布状況	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア流域文化研究	6. 最初と最後の頁 99-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村篤志	4. 巻 別冊4
2. 論文標題 清朝治下ハルハ=モンゴル社会における人の移動と駅舎	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北東アジア研究	6. 最初と最後の頁 163-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村篤志、ムンフバートル	4. 巻 34
2. 論文標題 清代モンゴルのフレイ以南14駅舎に関する基礎的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 内陸アジア史研究	6. 最初と最後の頁 95-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 5件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 駅舎の守人：モンゴル国ハラチン集団の歴史と記憶
3. 学会等名 『北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響』総括シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 結集するハラチン・ディアスポラ：遊牧社会における駅の諸相
3. 学会等名 国際シンポジウム「清帝国におけるモビリティ：モンゴルの場合」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 留まるモンゴル人・行き交う漢人：清代の駅・隊商路をめぐって
3. 学会等名 山形大学公開講演会兼研究報告会「遊牧社会の「日常」を描く：清代モンゴル史研究の新視角」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 ドローンからみたモンゴルの都市遺構：その歴史的意義（モンゴル語）
3. 学会等名 Mongolia-Japan center 公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 清代のハルハ社会における移動（モンゴル語）
3. 学会等名 モンゴル国立大学歴史学部セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 清代の駅とハルハ社会：サイロス駅を事例に（モンゴル語）
3. 学会等名 History of Eurasian Nomads: state, society and culture（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 清代漠北モンゴルの駅をめぐって：2018年調査報告
3. 学会等名 「前近代中央ユーラシアの南北交通システムの総合的研究」第2回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 清朝時期喀爾喀蒙古の人員流動探析
3. 学会等名 国際学術研討会「清朝政治発展変遷研究」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 清朝治下モンゴル社会における人の移動と駅
3. 学会等名 島根県立大学NEARセンター拠点プロジェクト第2回国際シンポジウム「北東アジア：胎動期の諸相」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村篤志
2. 発表標題 藤田嗣治の描いた「蒙古人」力士をめぐって
3. 学会等名 第54回 野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 岡洋樹	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東北アジア研究センター	5. 総ページ数 246
3. 書名 移動と共生の東北アジア：中蒙露朝辺境にて（中村篤志「遊牧と移住のあいだ：20世紀前半期フルンボイル社会の動態から」111-142頁）	

1. 著者名 S.チョローン, ホルチャ, A.A.ポリソフ, 岡洋樹, 堀内香里	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東北アジア研究センター	5. 総ページ数 434
3. 書名 ユーラシア遊牧民の歴史的道程（中村篤志「清代のハラチン駅とサイル=オス（モンゴル語）」319-333頁）	

1. 著者名 李暎, 李正吉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 584
3. 書名 北東アジアにおける近代的空間：その形成と影響（中村篤志「駅の守人：モンゴル国ハラチン集団の歴史と記憶」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	オユンジャルガル  (Oyunjargal)	モンゴル国立大学・歴史学部・助教授	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
その他の研究協力者	ムンフバートル  (Munkhbaatar)	チンギスハーン文化遺産研究所・研究員	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 山形大学公開講演会兼研究果報告会「遊牧社会の「日常」を描く：清代モンゴル史研究の新視角」	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
モンゴル	モンゴル国立大学		